

曾野綾子作品選集

1

桃源社版



婚約式

曾野綾子作品選集
婚約式



桃源社

〈檢印省略〉

曾野綾子作品選集 1	婚約式	著者 曾野綾子	昭和五十年六月二十日 印刷	昭和五十年六月二十五日 発行	発行者 矢貴東司	印刷所 太平印刷社	発行所 東京都中央区日本橋蠣殻町一丁目 十二番地	株式会社 桃源社
---------------	-----	---------	---------------	----------------	----------	-----------	-----------------------------	----------

曾野綾子作品選集

婚約式・目次

鯨漁場の凶

片隅の戦士

鸚哥とクリスマス

遠来の客たち

バビロンの処女市

硝子の悪戯

海の御墓

荒野の中の町

山と聖女

156 137 119 108 90 62 47 33 7

牛骨

172

身欠きにしん

183

火と夕陽

192

婚約式

207

男狩り

235

仲人の天才

245

青巖寺風景

261

解説 鶴羽伸子

273

装
幀

原

弘

曾野綾子作品選集

婚約式

鯨漁場の図

八月八日

先月、と言えば七月末に、朝会社へ出かける前に、お前は縁側で足の爪にマニキュアを塗っておいでだった。

「おお真っ赤、血のよう、母さんはそんな色嫌い」

と思わず言ったのに対して、お前は唇の端に心得た微笑をちよつと浮かべたきりで不意に、

「ママ、小夜子、今度北海道へ旅行するから、その時ママの昔の恋人の家を訪ねてみようかな、札幌で」

母さんはその時やはりどきりとした。母さんの胸の中で何年も、いいえ何十年も決心がつかぬままに過ぎて来てしまったことを、お前の口から、そんなにさり気なく言われたからと言って、母さんの心が今更痛むはずもないのだけだ……。

お前は重ねて空とぼけたような調子でお聞きだった。

「ママ、ママの恋人だった人って、美男子だったの？」

「母さんは綺麗かどうかなんて知りませんよ、ただね、本当に絵に描かれたキリスト様のような目鼻立ちの方だったよ」

この返事を、私は確かもうずっと前に、一度繰り返したことがあるような気がする。けれど母さんはその時も、そう答え直すより仕方がなかった。お前は、

「フフ」

とちよつと鼻先で人をおひやかすような笑い方をした。その無邪気さというかあどけなさというか夏の朝陽に燃え立つような笑いは、どうしても母さんに、お前が既にある男との間に出来た三つになる子供がある女などとは思えなかったし、ましてやお前がその生みつ放しの子供に何の愛着も覚えず、自分の生活以外に、というよりいつも一番身に近い男の事以外は考えてみようとしめない、浅はかな婦人だとも思えなかった。母さんはまさかお前のような娘を持つなどとは、想像したこともなかった。けれどやっぱり私は、小夜子、お前が可愛い。お前の娘、小さな道子は母さんの孫になるはずだけれど、母さんはどうしてもお前の方が可愛い。道子には、ただ宿命的な哀れさといとおしさを感じるだけ。

私はお前の北海道旅行が現在世話になっている閑原とい

う男と一緒になのだろうとは察した。道子の父親になる山岸という人と別れてから、お前が何人の男を遍歴したあげく、今の関原と親しくなったのか母さんは知らない。お前がそんな風な女になつてしまった事は、やはり一端は私の責任にあるのだけれど、お父様が亡くなられてから、戦争、強制疎開、引き移った先での罹災と、生きのびることにやつとだった母さんが、婚期にあつたお前に、母さんらしい賢い配慮をしてやる閑も物もなかったこと、言い訳がましいけれど、母さんの心は誰かに知ってもらいたいような気がする。

お前は亡くなられたお父様のあの美しさ——私にはちつとも魅力的だと思えなかつたけれど、遺伝的には優れた容貌——を受けついで、母さんには少しも似ていない、造作の鮮明過ぎるほどあでやかな彫りの深い目鼻だちをしている。手も足も蠟人形のように精巧。

けれど、女がそんなものを武器にしたら、もうわが身に負けてしまったことになるという事を、不運にも母さんは教えてやる時機を失つてしまった。それともそれは私の愚痴にすぎなくて、お前が今のようになつたことは、母さんの時代から背負わされた私達母子の宿命だの、お国が戦争に負けたことだの、貧しさだの、そんないろいろなる理由が雜り合つて出来たごく当たり前の成り行きなのかも知

れない。

終戦後、疎開先の千葉から帰つて来た私達が、やつと本郷に四疊半一間を借りて、ろくな食べものもなく物淋しい安物の茶簞笥などをちよろちよろと並べて暮らしていた頃、お前が最初に深い仲になつた山岸の世話で、国分寺の方の小さな家に住まえるようになったという事を、嬉しげに少し自慢気に話した時のお前の表情を、小夜子、母さんは今でも忘れることができないのだよ。それというのも、今と違つてあの頃の母さんは何にでもよく一々驚いていたからね。

しばらくして山岸との間に道子が出来て、案の定いろいろごたごたが起こつたあげく、道子の養育費の代わりに住んでいる家をくれて、それですっかり手を切るといふ事になつてから後も、お前はお金のためにいつも男が必要だった。人事ではない、その頃の母さんは全く無力で、お前の持つて来るお金を当てにして生活するよりほか、どうにもならなかつただけで、不思議とそんな生活の中にあつて、お前は傷ついたようにも見えない。母さんの方が、伏目がちの毎日に馴れてしまったような気がする。

しかし親子の間で、お前のそうした問題に関する限り、白々しいほど固くお互いに口をつぐむ習慣がついたのは、もうどれくらい前からの事だったろう。お前が道子を生ん

で三月目に、つてを頼んで見つけた大磯の海岸に近いある家へ里子に出すことに決まり、二人して連れて行った帰りだった。大磯駅の人気のまばらなホームに立つて、ふさふさと艶のある髪を風になびかせて、身軽になったからか楽しそうに微笑しているお前を見たその瞬間から、母さんはお前を自分の世界に繋ぎ止める何の鎖も残されていないことを発見した。

母さんとお前とは、毎日何一つ喧嘩もせずに穏かに暮らしているが、月と火星とに別々に住んでいるようなものなのだろうか。

「ママの恋人」とお前がいう人、今はもうこの世にはいないのだけれど、十九の母さんが思いつめていた、木原譲という人のことは、お父様が亡くなられてからは、お前によく話したものだ。今こうして母さんは、お前に宛てるようなつもりで筆をとってはいるけれど、別にお前に読んでもらえる当てではない。けれど、ちょうど今日あたり、お前は母さんが三十年來お経文のように忘れられずに記憶していた木原さんの昔の番地を頼りに、札幌の町を歩いているかも知れないと思うと、私はやはり思い返さずにはいられない。ここ一、二年の間、私のいい収入になつてゐる紹刺も（母さんの色の感覚は新らしくて外国人の方などにもとても評判なのだそうだけれど）今日はとても配色

など根をつめて考えられなくなっている。これで二日、私は重苦しく胸が詰つたような感じで、手もちぶさたに一人つくねんとしてゐることもできなくなつた。それだから、今日こそは皆書き留めてみたい、手仕事の好きな母さんは、昔から今までのきれぎれになつた思い出の小布を、せめて筆でなりとほそぼそと縫い合せてみたい思いがしてゐる。

私は今までに三度、北海道の木原家を訪ねようと思つた事があつた。最初は木原さんが画の勉強にパリに發たれる寸前に、矢も楯もたまらずあの人の膝に縋りに行きたかつた。その時のせつば詰つた思いの中だけでは、母さんは女の方から愛しているとうちあける事の恥多さも、相手に突き放された時の自分を失いそうなみじめさも、皆耐えて行けると思うほど強かつた。けれど実際に母さんの育つて來た時代には、習慣も常識も周囲も、そんな大それた行動を認めてはくれない。母さんにも人並はずれた勇氣はなかつたし、かえつて気狂いじみた愛情の現わし方は、自分を木原さんから永遠に遠のけてしまうものだと思つて、母さんは上野駅で青森行の切符をかう力もなく、とぼとぼとまた雨に濡れて本郷の家まで引き返して來た。何と言つても母さんには愛してもらへる自信がなかつた。それにはい

ろんな理由がある。

木原さんと知り合いになったのは、母さんが兄妹同様にしていた従兄の修吉さん、お前から言えばあの修吉おじさんが、新潟から上京して来たばかりの母さんを、東京で方方へ引き廻してくれていた時だった。今でこそ千葉の田舎に引き込んで、疎開以来大根作りも本職なみになっているおじさんだけれど、その頃は新らしがりやのぴちぴちした青年だった。木原さんは修吉さんの無二の親友ということになってはいたけれど、どうみても兄貴分だったらしい。事実修吉さんはある商社会社でこつこつ仕事を始めたばかりだったのに、木原さんは当時二十八の若さで、もう文展に三回も入選していて将来を約束された画家だった。

二人はよく連れだって出歩くのが好きだった。お前なんかはもう世界が違ってしまっているから何の感興も湧かないだろうけれど、浅草の日本館で田谷力三、木村時子のコンビでオペラというものが初めて盛んになりかけた頃だった。カルメンなんぞ上演された最初ではなかったろうかね。修吉さんもそんなものを見たがるハイカラ青年だったし、母さんが最初に修吉さんから木原さんを紹介されたのも、当時銀座の四丁目にあった、「カフェ・パウリスタ」という所だった。季節も何も覚えていないけれど、多分午後二時か三時頃だったのに、挨拶がすむと修吉さん

はすぐコーヒーとカツレッツを注文した。カツレッツが珍しかった頃の話だもの。木原さんは着物を着て、きっちりと袴をつけていた。いつでも袴のお好きな人だった。敏感に自分の服装や髪型などが、その洋風の眩しいほど明るいカフェの空気に合わないことを感じとると、母さんは初対面から気おくれがして、しっかりと声を出して挨拶することもできなかった。二人はすぐにその頃最初の試みとして帝劇で上演されていたロシヤバレリーナの「パヴローワの「瀕死の白鳥」の話や、岡田三郎助、黒田清輝、藤島武二など、その頃の文展の大家と言われた人達の作品について、子供らしいほど真面目な、尊敬に満ちた批評をし合った。

その時の二人の会話ほど、母さんにとって遠い世界の話もなかったけれど、私は今まで考えてみたこともなかった広やかな夢の多い視界が、明るく輝きながら目の前に展げて来たように思った。世の中で遠いはるかな前方だけに、ぱっちり目を見ひらいている人達の姿に初めて接して、母さんは黙ったままじっとりとその楽しさに酔い始めていた。

母さんはその時ナイフ、フォークの使い方も知らなかったし、豚の脂身がどうしても気持が悪くて呑みこめなかった。こっそりと二人の間に挟って食べ残していた母さんのお皿に目をつけて修吉さんは、

「秋ちゃん、食べられないの、しょうがないな田舎もんは」

と言ったのに対して、

「いいですよ、自由にしていた方が綺麗だ」

と何気なく言った木原さんの大らかな含みのある答えが、母さんの心に強い焼印をおしてしまったらしい。その時初めて木原さんの深い眼ざしが正面きつて注がれたのを私は意識した。そしてなぜか母さんはひどくたじろいだ。

自分が小さく塩をかけられたなめくじのように縮んでしまうような気がした。母さんはせめて自分が美しければ、と思った。そんな事がかけ橋になって、いつかは必らず木原さんの住む世界に登っていきけるのに、と思った。母さんの時代には、「愛する」という事は第一にひげ目という形で感じられたらしい。それがますます母さんの動きをとれにくくした。

それから時おり、母さんは木原さんと会う機会があった。修吉さんの家へもたびたび来られたり、上野の美術館の入口で待っていて下さったり、一度は外濠線（そとがうせん）の中でちょうどホームの三あたりを習っていた母さんが、ヴァイオリンケースを黒地に派手な矢羽くずしの紵の羽織（かづり）の袖の影に、ゆらりと隠し持つようにして立っていたのに、偶然乗り合せて気がつき、

「ほう貴女だったのか」

と見直すように、ひさし髪に結った母さんの顔をまじまじと射通すような目付で見られたこともある。やはり黒地に濃い茄子紺の堅縞の着物に、赤い半襟をきっちり細く見せた服装は、その頃の質素な母さんの身なりとしては少しは自信のあるものだった。母さんは臆せず木原さんの眼に見入りながら修吉さんの話などした。今の自分の姿だけが、いつも木原さんの目にふれてくれればいいと私はかなしく願うような気持ちになった。でも人間の心などというものは奇妙なもの、大縞のお対にでも角帯というくだけた服装の木原さんが、その時初めて母さんにとって身近に暖かく感じられた。

そのヴァイオリンを間もなく母さんは諦めて習うのをやめてしまったけれど、絵だけは木原さんという人が母さんの前に現われようと現われまいと、生まれつき見るのも描くのも好きだった。木原さんは美術学校の同期生で、御厨五郎、本多徳雄、西島朝一、清川良夫、熊田音彦などという人達と春草社と呼ばれる集まりを作っていた。母さんは文展で始めて見た木原さんの画を、今でも自分ながらびっくりするほど鮮明に覚えていてる。

木原さんは、修吉さんと私をその日も会場の入口で待ち受けてくれた。他の人達の作品に対する専門家として

の木原さんの批評は、母さんにこの人は芸術家としての嫉妬など知らないのではないのかしらと思わせたほど敬虔で大らかだった。美しさの掴み方は痛いほどの確で、少しは画のわかる母さんには、それがあらかじめ決められた二人だけの合言葉のようにはっきりと心の奥底に吸いとられた。薄暗い殺されたような光線の淀んでいる会場に、もし人がいなければ、母さんは満ち足りた嬉しさから木原さんの胸で泣いてみたかった。

そして幾室目かで、私達は木原さんの二点の作品の前に立った。

一枚は「漁村夕景」と題する淋しい小漁村の暮れ方の落を、暗い色調で溶け入るように見せたものだった。傾きかった漁師の小屋が細々とした煙をあげながら、隣同士によりそって薄暮の中にしよんぼりと浮かんでいた。そっと私の後に控え目に立ちながら、

「これは静岡県下のある小さな漁村なんですが」

と説明する、木原さんという人間から感じる素朴な心のぬくもりが、その日本的な陰影の濃い寂寥の中で、じつくりと画面一ぱいに滲み出していた。

もう一枚は「鯨漁場」の題で、北海道の鯨をあげる漁場の飛沫に輝いた海に躍る漁夫の群れが、盛り上がるような厚みのある筆致でえがかれている。魚の腹はキラキラと波

の間に光ってみえた。

「私は時々、画と文学の関係みたいなことを考えますよ」
明らかに母さんだけに、その時木原さんは不意に言葉をかけなさった。

「今の世の中で、一般の生活を十年先に引きずって行くものは文学なんですね。そして残念だが画はいつも文学の切り開いた道を後から追いかけている。私はその速度に追いつこう、十年飛躍してみたいと思ってこんなものを画いたんですがね」

ちょうどその頃、小夜子などは知りもしないだろうけれど、武者小路実篤や有島武郎などという人達の白樺派が、新しいヒューマニズムの立場から盛んに作品を発表していた。木原さんがその白樺派の行き方に、気持の奥底で深く共鳴していられることを、私は修吉さんから聞いて知っていた。裸婦を描く人が多い中で、木原さんの眼がそうした働く人達の世界の美しさにひかれていくことに、母さんはその時根強い愛着を覚えた。私の心には木原さんの短い言葉が余りにもさえええと理解できた。

「鯨漁場」の隣には偶然、木原さんとパリの生活を共にした西島朝一の「黒衣の女」が掛っていた。淫乱ではなかったが、女の眼と頬は異様に輝いていた。

でもその画を見てからだった。母さんは明け暮れ木原さ

んのことを考えるようになった。どうしてその好意の芽のようなものを、明るみの中で恥ずかしがらずに育てられなかったのか母さんにはわからない。ただ私には昔から自分に厳しすぎる不思議な理屈っぽさがあった。人を愛するといふような出来事の蔭には、何かよほどの大きな訳がなければならぬ。そうでなかったら深い因縁のようなものでもなければならぬはずだ、と私は考えたのだった。けれど母さんと木原さんの間は何だろう、何にもありはしない、偶然会った行きずりの人にも似ている。それを思う母さんの心は余り軽々しい。母さんは無性に自分に哀しい嫌気のようなものを覚えた。

思えば母さんの愛情は、初めから一人ぼっちで道を歩き出さねばならなかった。誰も実際に母さんの道しるべになつてくれたり、カンテラの灯を見せてくれる人はなかった。不安で盲目になつて、母さんはますます「愛情は伏せなければならぬ」という世の中の常識に逃げこもうとした。

修吉さんだとして、母さんの気持をうすうす知りながら、それを真面目な態度で木原さんに切り出してくれるだけの大人気もなかった。一度遊びに見えられた時、母さんはお茶を持って出て挨拶してそのまま隣へ引きさがつて来たけれど、修吉さんが、

「彼女、君に夢中なんだぜ、あれで。もらつてやつてくれないか、君」

と言つたのを耳にした。木原さんは返事をなさらず、修吉さんが癖のある音をたててお茶を啜つただけであつた。母さんはその時滅入るような淋しさを体中に覚えた。木原さんが返事をなさらなかった事にはない。「夢中」などという言葉で片付けられた母さんの心持が、ひどく安っぽく聞えて、何もかもが音をたてて瓦解してしまふような頼りなさを感じた。二人の部屋には目のつんだ濃い沈黙の気配が長く続いた。

その晩母さんは何度も思い返したあげく、木原さんに一通の手紙を書いたのだった。母さんの唯一の武器は、正直にありのままの気持ちを告げることしかなかった。一番月並みなことだったかも知れないけれど、「あなたをお慕いする気持は一時の軽率なものではございません。それですから私は従兄の言葉が苦しかったし、またあなたのことをはつきりと心から遠ざけるといふ方策も尽きています」とも書き加えた。

その手紙を投函してから後の一週間を、私は夢を見ている人のように苦しみながら過した。最後のものを投げ捨ててしまったような思いもした。しかし木原さんは返事を下さった。母さんは今でも覚えているが、それは、

「あなたの手紙を読み一日中考えました」

という書出しで始まっていた。私はその一言だけでも胸を裂かれるように嬉しかった。その短い手紙には、最近、西島朝一氏と木原さんがパリへ発たれる事に決ったこと、自分はその間あなたを縛る気にはなれない。また自分も今は勉強以外の事には目をつぶる気である。淋しいけれど自由でもないなければならない。単なる挨拶ではなくて、自分はこの問題を数年間のばすことが、あらゆる面からみてやはり正しいことだと思ふ、と書いてあった。

読み終った時、母さんは木原さんは本当の女の気持を御存じない、と思わずにいられなかった。小夜子、お前などにも母さんのその時の願いはとうてい理解できまいけれど、母さんは五年でも十年でも木原さんの妻として帰朝を待ちたかった。その間に木原さんの御両親に仕えて、その人達を愛して生きることが苦痛だなどとは思えなかった。

変な言い方かも知れないが、私はたとえ木原さんの御両親が癪病で手足もくずれ果てた重病人であつても、喜んでそのどろどろの血膿の看護をしながら待ち続けたい。母さんには木原さんの「賢い配慮」が淋しかった。

その頃木原さんはもう三十になつていられたはず、今考えてもその頃の青年は心意気もあつたし、孤独に耐えることも強かった。

そしてそうそう、それから間もなく母さんは最初に、北海道へ荷物を作りに行かれた木原さんを訪ねようと思つたのだった。母さんの耳もとでは、木原さんを運んで行く横浜港の船のドラの音が鳴り響いている。今、この機会を失えば終りだとわかつていながら、母さんにはほとんど決められてゐる結末、——一人で勉強したいと言われる木原さんから、宥められて帰されるに違いないと言う事——が透けてみえているように思えて、上野の出札口の前に立つてただ一言「青森」という力が湧かなかつた。もちろん、母さんは三年あるいはそれ以上もの木原さんの留学を待ち続けることはできないのを知っていた。なぜといって、幾度となく木原さんの手紙を読み返しているうちに、私はだんだんとその悲しい真意をつかみ出してゐたのだもの。木原さんにとって私は別に何でもないのである。一時、手紙を頂いたという嬉しいだけに我を忘れてもいたけれど、酔いざめの後につくづくと自分の呆けた姿を見直すように、私は自分がまだ木原さんの愛憎の対象にさえ入つていなかったことを、つくねんと味気なく悟り始めていた。

母さんの気持がもう既に知られてしまつてゐる以上、それでもまだ万一に望みをかけながら年をとるのも構わずに待つていて、帰つて来られた木原さんが見向きもなさらなかったら、母さんは物笑いになるだけだろうし、またたと